Cover

~~VII~~, 1870

ANCIENT AND MODERN METHODS

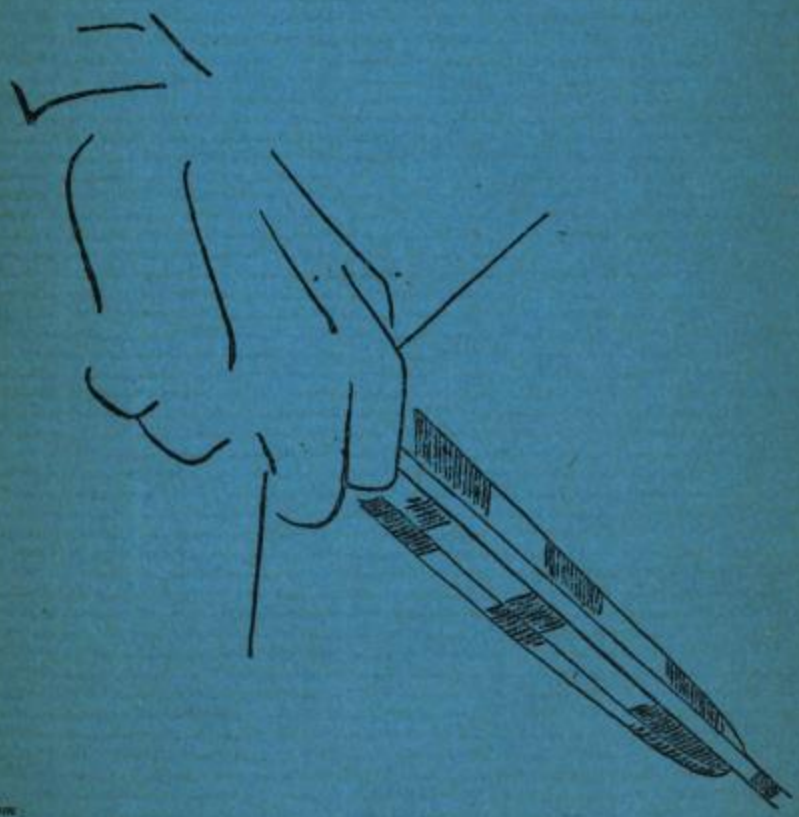
OF

ARROW-RELEASE.

BY

EDWARD S. MORSE.

Director Peabody Academy of Science.



From:

Essex Institute Bulletin,

Oct.–Dec., 1885.

Digitized by Google

古代と現代のリリース射法について

著者 エドワード・S・モース(ピーボディ科学アカデミー理事)

[1885 年 10 月～12 月、エセックス・インスティテュート紀要第 17 巻より]

さまざまな種族が実践している弓から矢を放つさまざまな方法を示すデータを収集し始めたときはただの好奇心でした。しかし、マスケット銃やライフル銃によって世界のあらゆる地域で急速に取って代わられているこの武器の取り扱い方法を保存することが重要であることがすぐに明らかになりました。この最も古い武器である石の鏃だけを使う部族がまだ残っている一方で、弓を使うものが残っていてもライフルを使う部族もある。最近になって、弓矢を捨ててしまった部族や国もある。

フレスコ画や岩の彫刻が示すように、現存する種族だけでなく、古代の種族の矢の放ち方を示すスケッチやその他の覚書がかなり溜まってきて初めて、矢を放つという些細な技術でさえ、過去の種族の血縁関係をたどる上で興味深い結果をもたらす可能性があることに気づいた。私は、不完全ではあるが、これまでに収集したデータを公表することにした。この論文を海外に送るための回覧の形で使用するつもりであり、このテーマについてのより広範な回顧録のためのさらなる材料を確保することを願っている。

私がこの問題に興味を持ったのは、日本人の友人の射を見たのがきっかけだった。イギリスのアーチャーが何世紀にもわたって実践してきた通常の射法に慣れ親しんでいた私は、弓矢のようなシンプルで原始的な武器を適切に扱うための複数の方法があることを知らなかった。イギリス式では、弓は鍛冶職人のようにしっかりと握らなければならないが、日本式では、弓はできるだけ軽く握る。英国式では、弦の衝撃を受けるために、腕の内側と下側に革のアームガードをつけなければならないが、日本式では、矢を放つと同時に、弓が手の中で回転し、弦が腕の外側に来るので、腕の保護は必要ない。英国式では弓を真ん中で握り、両端から等距離にある点から矢を放つが、日本式では弓の下 3 分の 1 付近を握り、そこから矢を放つ。

私が知る限り、このまったくユニークな方法は、おそらく封建時代の弓兵が、地面に置かれた分厚い木の盾の後ろから、膝をついた姿勢で矢を射る習慣から生まれたものだろうこのような特徴は、2 つの民族ではまったく異なっているが、その異質さは矢の引き方と放ち方にも及んでいる。イギリス式では、弦は最初の 3 本の指の先で引き、矢は 1 本目と 2 本目の指の間に軽く挟み、指をまっすぐに伸ばすと同時に手を弦から離す。日本式では、弦は曲げた親指で引き、人差し指で親指を弦に押さえつけ、矢は親指と指のつなぎ目の股に挟む。曲がる棒、シンプルな紐(弦)、細長いかかりのついたシャフト、両手で引くという、非常にシンプルな弓という武器の使い方に、このような顕著で重要な違いがあることから、私は当然ながら、世界各地の弓の使い方をさらに調べてみた。驚いたことに、矢を放つ方法には、改良を加えたまったく異なる方法や亜種が数多くあるだけでなく、これらの方法はすべて、歴史上早い時期から行われていたことがわかった。弓に弦を張るという単純な行為でさえ、民族によって大きく異なるのだ。弓矢を放つ最も単純な形は、世

界中の子供たちが弓矢を初めて使うときに自然に採用するもので、まっすぐに伸ばした親指の先と、曲げた人差し指の第一関節と第二関節の間で矢をつかむものである。

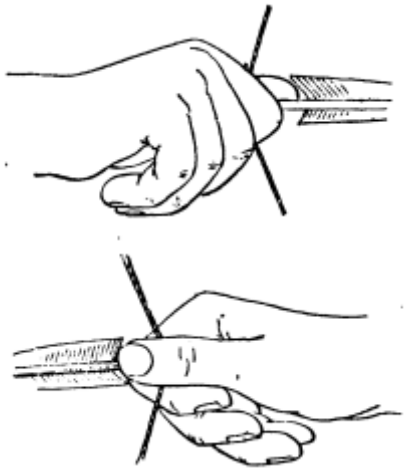


図 1　プライマリ・リリース

というのも、アメリカ人やインド人、日本人の子供たちは、矢を射るとき、必ずこのように矢をつかむからである。軽い弓や弱い弓では、このようなリリースが最もシンプルで最適である。しかし、このリリースでは、指に大きな力がない限り、硬い弓を引くことができない。図 1 は、このリリースの図である。このリリースに使われる矢は、持ちやすいように、ノックエンド（矢の近端）につまみがついているのが普通で、このような形の矢は、このリリースか、それに似たリリースを示している（図 2)。

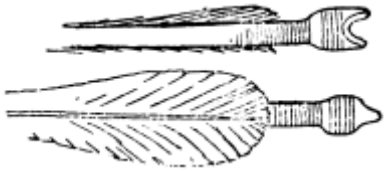


図 2 オレゴン州のノブ付きノック

蝦夷のアイノス族(Ainos)は、このシンプルなリリースを実践している。彼らの弓は短く強いが、アームガードを必要としない。弓の高いテンションによって弦は弓を打つ前に停止されます(訳注:ストリングハイトが高いという意味だと思われる)。 何名かの古いイギリスのアーチャーもテンションが高い弓を使用する場合アームガードの使用を避ける。南アメリカのデメララ・インディアンがこのリリースを実践していると記録されており、私の手元にあるユート・インディアンの写真からも、この部族はこのリリースを実践していると推測できる。ジェームズ・スティーブンソン大佐によれば、ナバホ族がプレーリード

ッグを射るとき、矢が的から外れても地面を貫通しないように、この離れを使うという。またダニエル・S・ヘイスティングス氏によれば、チペワ・インディアンもときどきこの離れを使うという。私はS.J.ミクスター博士に、ミックマック・インディアンの老人がこの方法で矢を放っている写真を撮ってもらった。このインディアンは、シャロール湾北岸のカスカペディア集落に住む最古のミックマック族の一人で、ミクスター博士によると、少年時代にはよく弓を使い、矢を放つ練習もしたという。彼はまた、弓の使い方について、カナダのその地域の他の部族も同じように矢を引いたと語った。ムースヘッド湖のペノブスコット族のある部族は、その部族で行われているこのリリースを教えてくれたが、矢を放つ方法はほかにもあると言うと、信じられないような顔をした。この原始的な矢の放ち方を、私はプライマリ・リリースと呼ぶことにする。

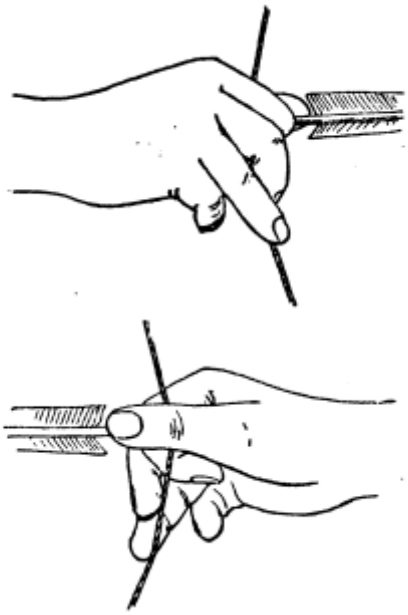


図 3　セカンダリ・リリース

次に考えなければならないのは、プライマリから直接派生したリリースである。親指を伸ばし、人差し指を曲げて矢を握り、中指と薬指を弦に当てて矢を引く。図3は、このリリースにおける手の姿勢を示している。オタワ・インディアンのポール・マメゴウェナ氏によると、彼の部族はこのリリースを実践しており、私にその方法を教えてくれた。フランク・ハミルトン・クッシング氏のご好意により、私はズーニ族の酋長に彼らの方法について尋ねることができた。ウィスコンシン州北部のチペワ・インディアンについて、ダニエル・S・ヘイスティングス氏（元ノーザン・パシフィック鉄道土木技師）が次のように書いている。親指と人差し指だけを使っている人もいれば、中指を使っている人もいる。また、中指と薬指を加えて弦を引くのを補助し、親指と人差し指の間から矢が放たれるの

と同時に、中指と薬指から弦を滑らせる人もいる。「このリリースは、プライマリ・リリースとは明らかに異なるが、弦を引き戻す際に 1 本または 2 本の指の補助が加わるという点で、プライマリ・リリースをさらに進化させたものであり、ヘイスティングス氏の説明は、2 つのリリースの間に存在する自然な関係を裏付けるものである。そのため、これをセカンダリ・リリースと呼ぶことにする。

聡明なオマハ人であるラ・フレッシュ氏は、セカンダリ・リリースと十分に異なり、別の形式として認めるに値する、彼の民族が実践しているリリースを見せてくれた。このリリースでは、人差し指は曲げず、その先端をほぼまっすぐにして、矢を固定するのではなく、中指と薬指と同じように弦を引き、親指は第 1 次リリースや第 2 次リリースと同様に、矢をつまむ。このリリースをターシャリ・リリースと呼ぶ。(図 4 参照) A.W.ヴォグデス中尉 (U.S.A.) によると、スー族、アラパホ族、シャイアン族はこれを実践しており、ジェームズ・スティーブンソン大佐 (Col.James Stephenson) は、後者の 2 部族だけでなく、アッシニボイン族、コマンチ族、カラス族、ブラックフィート族、ナバホ族でもこのリリースを実践していることに気づいている。

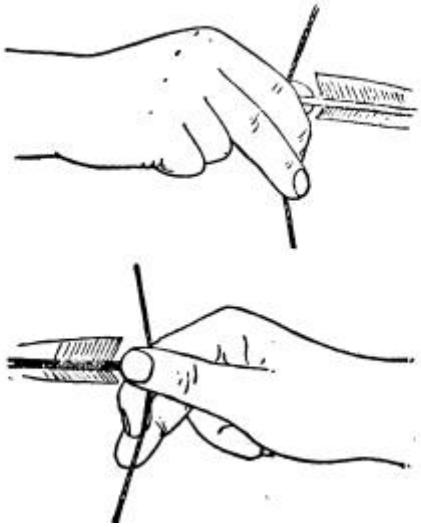


図 4　ターシャリ・リリース

ラ・フレッシュ氏とヴォグデス中尉によると、この弓を使う部族は、弓をほぼ水平に構える。弓を水平に構えるとき、引き手は手のひらを上にして持ち、矢はもちろん弓の上に置く。ズーニ族とオタワ族では、弓を垂直に、またはほぼ水平に持ち、矢は弓の左側に置く。もともとは弓を水平に構えていた可能性があるが、森の中で射ったり、他の人と隣に並んで射ったりする必要が生じたため、弓を垂直に構えるようになった。このように、弓を持つ手を使いやすい方向に回すと、矢は弓の垂直より左側に来る(訳者注:左で弓を持つ

場合)。後述するように、矢が弓の垂直の右側に来るか、左側に来るかは、ほとんどの場合、リリースの方法によって決まります。しかし、プライマリ・リリースとセカンダリ・リリースでは、矢をどちらに置くかはほとんど変わらない。ジェームズ・スティーブンソン大佐によると、ナバホ族のインディアンは3つの放つ方法を実践している。すなわち、すでに述べたプライマリ、ターシャリ、そして地中海式である。

最近、シャムの大使がこの国を訪問した際、通訳のウィルバーフォース・ワイク氏の好意で、大使館のメンバーからシャムの弓の使い方に関する興味深い事実を聞いた。シャム人がターシャリ・リリースを実践していることは興味深かったが、弦にかける指は2本ではなく1本だけという違いがあった。ナイ・トゥアン氏は私にその方法を説明し、弓矢はほとんど使われておらず、小鳥や魚を射るのに限られていると説明した。大使館のスネー少佐によると、毒矢も使われ、その場合は弓を水平に構え、弓を持つ手は弓だけでなく、矢をアローレストも握るのだという。前世紀には、トルコのアーチャーは、弓を持つ手に弦の方向いた溝のあるホーンを使うのが通例だった。この溝がある部分がアローレストとなり、この工夫によって、弓はもっと後ろに引くことができ、鏃を4-5インチオーバードローできた(訳者注:Siper)。

Siper

ウィルキンソンによれば、古代エジプト人も、この弓の奇妙な付属品を使いこなしていたという。E.H.マン氏は、アンダマン島民に関する著作(1)の141ページで、大アンダマン島の住民は「矢を親指と人差し指の上関節の間に置き、中指と薬指で弦を口に引き寄せる

---

[1] 1 On the Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands. By Edward Horace Man. Reprinted from the Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.(アンダマン諸島の原住民について。エドワード・ホレス・マン著。グレート・ブリテンおよびアイルランド人類学研究所誌より転載)

と述べている。マン氏はこの記述の中で、人差し指を曲げて矢に押し当てるとは述べていないので、この民族が行っているのはターシャリ・リリースに違いない。

これまで、親指と曲げた人差し指を弦に押し当てる３つのリリースの方法について考えてきたが、親指と曲げた人差し指を弦に押し当てる方法は最も単純で、おそらく最も初期の方法の１つであろう。セカンダリ・リリースは、中指、あるいは中指と薬指の先端を弦に当てる点が異なるだけであり、プライマリ・リリースの発展形と見なすべきものですが、別の方法ではあります。ターシャリ・リリースは、人差し指の位置が異なり、人差し指は曲がって矢に押しつけられるのではなく、ほぼまっすぐで、その先端は、中指の先端、時には薬指の先端と同様に弦に掛かる。これがターシャリ・リリースである。

我々は今、文書的証拠によって、何世紀にもわたって北地中海諸国の間で、そして何十世紀にもわたって南地中海諸国の間で流行してきたリリースについて考えてみよう。これは、私たちが知る限り最も古いリリースである。今日でも、現代のイギリス、フランス、アメリカのアーチャーによって実践されており、中世のヨーロッパのアーチャーによって実践されていたリリースである。このリリースは、第一、第二、第三の指の先端で弦を引き、指の腹を弦に掛け、指の先端の関節をわずかに曲げる。矢は人差し指と中指の間に軽く挟み、親指はまっすぐにして動かさない。地中海沿岸の国々では、歴史的に古くからこのリリースが行われていたので、地中海リリースと呼ぶのが適切であろう。次の図５はこのリリースの形式を示している。

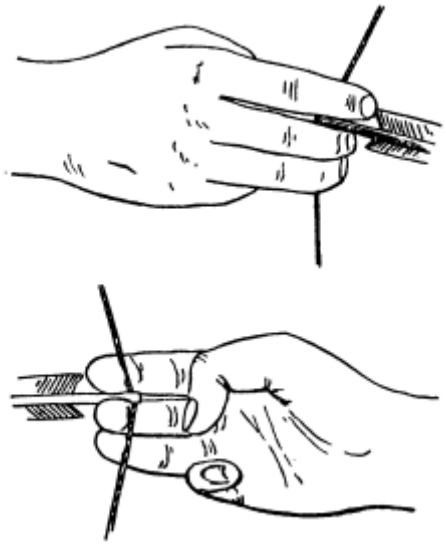


図 5　地中海リリース

このリリースの練習では、指の先端の消耗が激しいので、革の手袋や革の指先を着用する。ロジャー・アシャムは、1544 年に書かれた "Toxophilus "の中で、次のように述べて

いる：「アーチャー用のグローブは、主に指を傷つけずに済むようにするためのもので、鋭利な弦を力の限り耐えうるようにするためのものである。そして、撃つとき、彼の射の力は、人差し指と中指の上にある；なぜなら、後ろにある薬指は全く弦の重さに耐えられないからである； そのため、2 本の指は革を厚くしなければならない。一番前の指が最も適している、 なぜなら、その指が最もよく動くからだ、そのために自然は、親指をヨックしたのである(訳者注: as a man would say, yocked it with the thoumbe.)。

ハンサードは、「弓術の書(Book of Archery)」の中で、フランドル人は人差し指と中指のみを使うと述べている。このフレミング流の地中海リリースは、中世では一般的なものであったと思われる。ハンサードの本には、アーチェリーに関する多くの興味深い事柄の中に、著者がパリの王立図書館で掘り出した古風な黒文字の本の記述がある。この本は 13 世紀の終わりか 14 世紀の初めに書かれたものである。モドゥス王の書(The Book of King Modus)と題され、狩猟における弓の使い方についての論考である。その中に "弓術の指南(Instructions in the Art of Archery) "という章があり、矢を放つ方法について、"3 本の指で矢を引き、人差し指とその次の指でノックを挟む。「矢を垂直に構えた弓の左側に置く必要がある。この位置は、弦が引かれるとき、矢を挟む指の摩擦で矢が右に振られる傾向があり、同時に弦を挟む指の摩擦で弦がやや右に回転し、矢がずれる傾向があるためである。このようなリリースの場合、矢は弓の垂直より左側になければならない。彫刻や手稿の絵、彫刻などで、矢が地中海のリリースのように表現されているもので、そうなっていないのは間違いである。このリリースは、これまでの他の放弓より進歩していることは間違いなく、より硬い弓を引くことができ、矢を放つ瞬間も非常に繊細でスムーズである。

米国信号調査隊のアラスカ北西海岸への遠征に同行したジョン・マードック氏のご好意により、ポイント・バローのエスキモーが地中海リリースを実践しているとの情報を得た。また、マードック氏には、北極圏の人々のアーチェリーに関する他の 2 つの文献を紹介してもらった。ハウゲート極地探検隊の博物学者、ルードヴィッヒ・クムリエン氏は、カンバーランド・サウンド・エスキモーについて、「この武器を射るとき、弦は右手の人差し指と中指の第一関節に置かれる」[2]と述べている。クラウス兄弟は、シベリアの東ケープの原住民は矢を親指と人差し指の間ではなく、人差し指と中指の間に持つと述べている[3]。エスキモーの部族でこのリリースを見つけたのはやや意外だった。この民族のリリースは、プライマリかセカンダリのどちらかだろうと思っていたからだ。

---

[2] Bulletin of the U. S. National Museum, No. 15, p . 37.

[3] Deutsche geographische Blätter, Vol. I, p. 33.

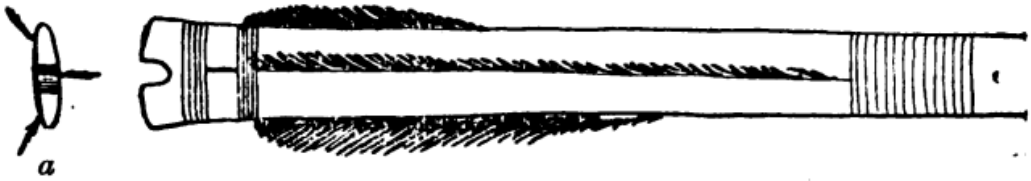


図 6　ポイントバローエスキモーの矢、ハーフ・サイズ

少なくとも西海岸のエスキモーの間で、この予期せぬリリースが行われていたことを裏付けるものとして、マードック氏は矢のつがえ口の形状に注目し、矢のつがえ口に直角に平らになっていることに気づいた。この独特の扁平が矢の飛びと関係している可能性もある。このような矢の扁平は今まで見たことがなく、このような形状の矢は、矢を放つときに使用されるリリースの方法に関連しているに違いない。図 6 にこの矢の外観を示す。

もしマン氏の情報が正しければ、小アンダマンに居住する部族は地中海解放を実践していることになる。先に触れたアンダマン島民に関する著作の中で、著者は（p.141）、小アンダマンと大アンダマンの南部に居住するジェラワ族は、「人指し指と中指の中間の関節で矢のつがえ、同じ関節で弦を引くという、我々の間で一般的な方法を採用している」と述べている。

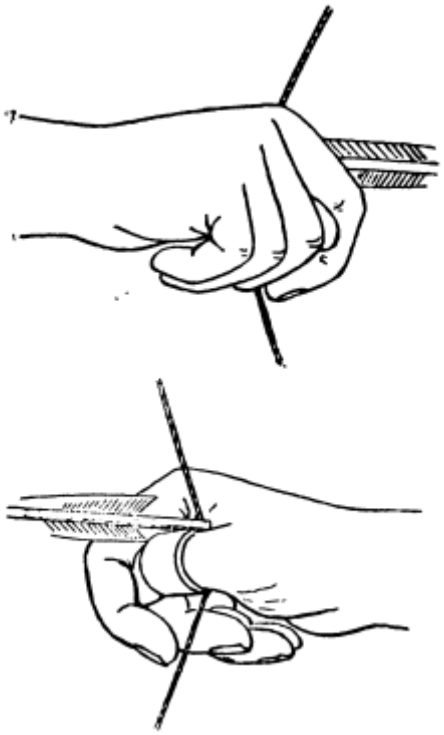


図 7　モンゴル・リリース

この 4 つのリリースは、互いに連続的に変化したものと考えられるが、必ずしもそうであるとは言わない。図 7 のリリースの場合、弦は掛かった親指によって引かれ、人差し指の先端は親指をこの位置に保持するのを助ける。矢は親指と人差し指のつなぎ目で持ち、指の付け根で矢を弓に固定する。このため、矢は常に弓の垂直より右側に置かれる。この矢の放ち方は、満州人、中国人、韓国人、日本人、トルコ人など、アジア民族の特徴である。ペルシャ人もこのリリースを練習しているが、これはおそらく、昔のアジア民族に近かったり、友好的であったりしたために身についたものであろう。

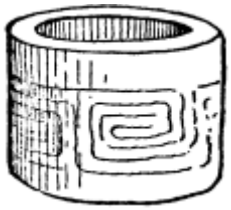


図 8　中国の親指リング

このリリースは、ほとんどモンゴル人だけで行われているため、モンゴル・リリースと呼ばれることもある。このリリースでは、親指は何らかのガードで守られている。満州人、中国人、トルコ人、そしてペルシャ人は、親指の付け根に太いリングをはめる。このリングの太い縁が、弦を引き戻すときに弦に当たり、同時に親指をまっすぐに伸ばすことで弦を素早く離すことができる。指輪は、角、骨、象牙、石英、瑪瑙、翡翠など、どんな硬い材料でも作ることができる。これらの指輪はしばしば非常に高価である。私は広東で 300 ドルもするものを見せてもらった。

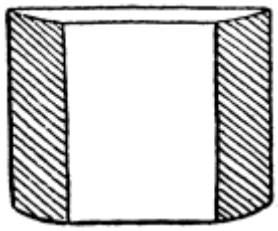


図 9　翡翠のリングの断面

図 8 は、広東人が使うような普通の角の指輪を断面で示したものである。図 9 は、翡翠で作られた中国の親指用リングを断面で示したものである。このリングは、太い弦を持つ弓に使用される。このリングは、弦が太い弓に使用されるため、それに応じて大きくなる。図 10 を見ればわかるように、韓国のリングは中国のそれとはまったく異なる。リン

グは薄く、その形状から拇指球を保護するためのものであることは明らかである。弦は、中国式のようにリングのヘリに掛かっているのではなく、リングの側面にかかっている[4]。

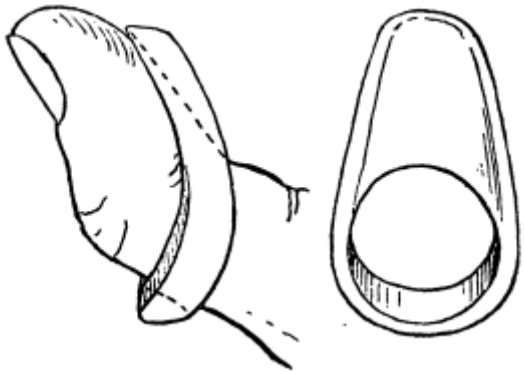


図 10　韓国の親指リング

日本のアーチャーは、親指と 2 本の指で構成されるグローブを親指リングの代わりに使用する。手袋の手首は長いバンドでしっかりと手首に固定されており、このバンドは一方のフラップに固定され、反対側のフラップの穴を通っているため、縄のように引き上げることができ、その後、手首に数回しっかりと巻き付けられる。手袋の親指はかなり太くなっており、非常に硬い（図 11)。その動作は韓国のリングと同じである。

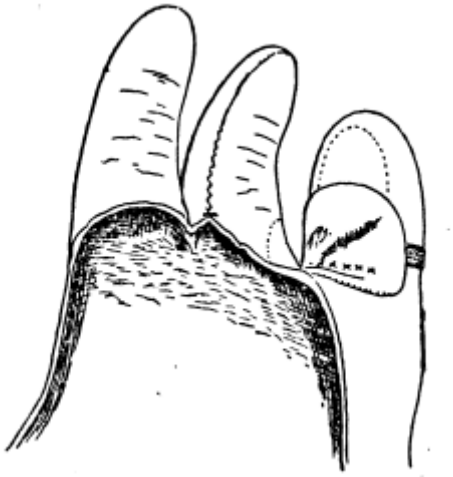


図 11　弓手の手袋（一部分のみ示す)。

[4] 駐日韓国大使から聞いた話では、韓国人はアーチェリーでは左右どちらの手でも矢を引くことを教わるが左手が最も効率的だと考えていると聞いた。矢を放つ方法を説明するために、彼は左手で矢を引きました。弓はしっかりと握られ、アームガードが着用されていました。

韓国と日本の練習では、人差し指と中指が親指を弦の上で曲げたままにするのを助けるが、モンゴルのリリースでは人差し指だけが使われ、他の 3 本の指は動かず閉じている。しかし、本質的な特徴は変わらない。北日本の若い日本人は、私に彼のリリース方法を説明する際、すでに述べたように親指と人差し指を連動させて弦を引き戻し、セカンダリ・リリースで示したように、中指と薬指の先端で弦の引き戻しを補助した。添付の図は上から見たモンゴルの引き手のポジションを示すもので、私が広東の満州兵からスケッチしたものである。(図 12)。

図 12　満州人

ペルシャ人とトルコ人は親指のリングを同じように使う。図 13 はペルシャの親指リングを表したもので、Meyrick の "Ancient Armour "に掲載されている図面からのコピーである。ハンサードは別の著者の言葉を引用しながら、「初期のトルコのスルタンの一人は、余暇を利用してこのような指輪を製造し、お気に入りのパシャたちにプレゼントしていた」と述べており、また、カーネリアンの親指リングはコンスタンチノープルのバザールで簡単に入手できるとも付け加えている。ペルシャのアーチェリーに関するいくつかの注釈は" Hansard's Book of Archery "の p.136 にある。

The "Archers' Register "は、1797 年に男爵ジョセフ・バンクス卿の依頼により、ロバート・エインズリー卿がコンスタンチノープルから入手し、彼の通訳によって翻訳された "Anecdotes of Turkish Archery "の写本から多くのメモを掲載し、"弓は 3 本の指で弦を引くのではなく、右手の親指で引き、矢はそのすぐ上の弦の上に置かれた。拇指球を覆い、拇指球のすぐ上に矢を置く。拇指球を覆うものは、一端がリング状になっており、関節の上に通す。内側に突起したベロがあり、弦がガードから親指の曲がった関節に滑り落ちるのを防いでいた。ガードの内側には革が張られていた。革のストラップとバックルに取り付けられた

木の土台に固定された長さ数インチのホーン溝からなる奇妙な仕掛けが、押し手に固定されていた。溝は内側に突き出している。矢は親指の上に置かれ、弓の右側から放たれるため、イギリスとは逆に外側が高くなっている。"

図 13　ペルシャ人の親指リング

このほかにもリリースの形があることは間違いないが、すでに述べたものがおそらく主要かつ最も効果的なものであろう。私はシンガポールで、マラッカの D.F.A.ハーヴェイ氏のご厚意により、マラッカの矢を手に入れることができた。マラッカの D. F. A. Hervey, Esq. の好意により、スマトラ島出身のテミアン族のマレー人リリースを入手することができた。弓は水平に構え（弓の中央には矢が通る穴が開いている）、3 本の指は弦の上に曲げ、矢は 1 本目と 2 本目の指の間に挟み、親指はまっすぐに立てる。

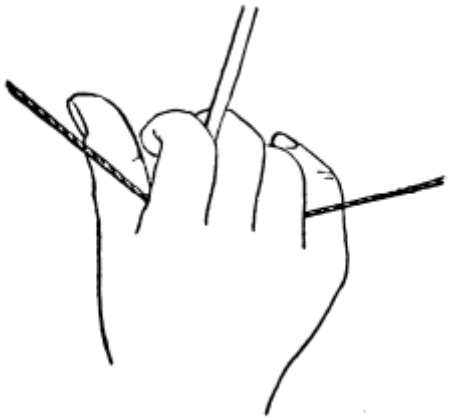


図 14　テミアン人のリリース

図 14 のように、小指を部分的にまっすぐにして弦に当てる。これは弱いリリースで、小さな獲物や魚の射撃にのみ使用された。この人々は、病気の霊(the spirit of sickness)に火を放つ際に、まったく異なる形のリリースを用いる。弓は前述の弓と同じように穴が開いており、矢は末端の近くに肩があり、矢が穴を通らないようになっている。矢の先には引火性の物質でできた火球がゆるくつけられており、矢を放つと、矢の肩が弓に当たって急に止まり、その勢いで火球が空中に放出される。このリリースを図 15 に示す。人差し指は弦の上を通

って矢の下を通り、親指はまっすぐにして矢をつかむ。親指と指の間に矢を挟む。これは非常にぎこちなく、非効率的である。このリリースとその前のマレー式リリースの説明は、ハーヴェイ氏から言語学の観点から質問を受けていた老人から聞いたものである。これまでに紹介したリリースは、生涯を通じて研究されたものである。

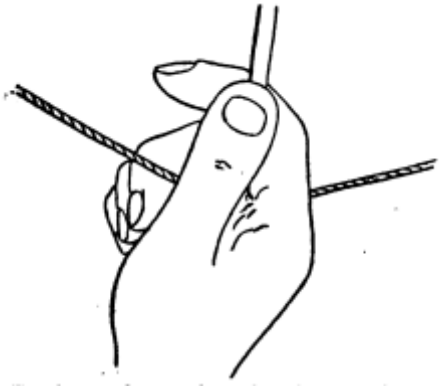


図 15　病気の霊に火を射るときのリリース

さて、次に私たちに知られるようになった古代の人々のリリースを、彩色写本、フレスコ画、岩面彫刻、その他のグラフィックを検証してみよう。これらの多くは伝統的な方法で描かれているため、意図された正確なリリースを正しく解釈することは非常に困難である。多くの場合、特にフレスコ画に描かれているような古代エジプトや、装飾的な壷に描かれているような初期ギリシャのある種の形では、矢を放つ方法を見分けることは不可能に近い。場合によっては、放たれた矢は 2〜3 種類の矢のいずれかを表しているのかもしれない。多くの放たれた矢が誤って表現されていることは疑いない。エジプトのアーチャーの図では、手が繊細に矢を引くように描かれているが、強い弓のドローイングは不可能です。エジプトのアーチャーが強い弓を使用することは、彼がその真ん中に膝を押し付け、上の弦のコードを結んでいる間、弓を支えるように表現される方法で見ることができます。

Fig. 36. Bracing a Stiff Bow

訳者注

しかし、明確に解釈できるものについては、アッシリアから説明するのが一番であろう。私は、大英博物館の素晴らしいアッシリア・スラブ・コレクションと、ルーヴル美術館のアッシリア・コレクションを短期間研究する機会があった。戦争や狩猟のさまざまな場面が生き生きと描かれ、弓を引く弓兵の姿も完璧に表現されている。最初に、私は非常に不思議な説明のつかない不一致なリリースの形式を採用した、それはアーチャーの右側、または引き手が、見るものに向かって表現されたとき、手はほとんど例外なく、プライマリまたはセカンダリのリリースであった一方、アーチャーの左側、または押し手が、見るものに向かって表現された場合、リリースはほとんど例外なく地中海リリースであった。言い換えれば、右に向かって射るように表現されているアーチャーは、例外なくプライマリまたはセカンダリ・リリースで、左に向かって射るアーチャーは、例外なく地中海リリースである。

図 16　アッシリア人

石版の左側にアッシリア人が描かれ、右側の敵と戦っているとすれば、敵は別のリリースを実践していたと考えることができるだろう。例えば、エジプトのフレスコ画では、ラメセス 2 世が戦車に乗ってアラブ人と戦っているが、敵は別のリリースを実践しているように描かれている。多くの場合、アッシリア人は絵の左側にいるが、右側にいて左に向かって撃っている場合もある。そのため、敵がどのようなリリースをしていたかを判断するのは困難である。私は、1 つか 2 つのケースでは、モンゴル式リリースが意図されていたのではないかと疑っている。しかし、親指のリングは描かれていない。上記の矛盾を無視して、彫刻に表されているリリースをそのままにすると、アッシリアの初期の弓兵、つまりアスルナジルパルの時代、つまり紀元前 884 年頃の弓兵はすべて、図 16 に示すように、プライマリ・リリースであるのに対し、紀元前 650 年のアスルバルニパルの時代のアーチャーでは、図 17 に示すように、セカンダリ・リリース、あるいは三本の指の先端が弦の上にあるリリースが行われている。この 2 つの時代の間に、紀元前 745 年から 705 年にかけての彫刻、特にセナケリブの遠征を表す平板は、クユンジク宮殿への襲撃を表しており、プライマリとセカンダリのの両方が表現されている。

図 17　アッシリア人

これらの図の正確さを信頼できるとすれば、本論文の最初の部分で主張したように、プライマリ・リリースからセカンダリ・リリースへの発展において興味深い関係が示されている。おそらく、プライマリの傾向があることを示す証拠として、矢はノックの先端が球根状になっていることが挙げられる。また、紀元前 650 年のアスルバルニパルの第二次対エラム戦争とアルアムー包囲戦の石板には、多くの弓兵が右手を観察者に向け、地中海リリースを行っている（図 18）。

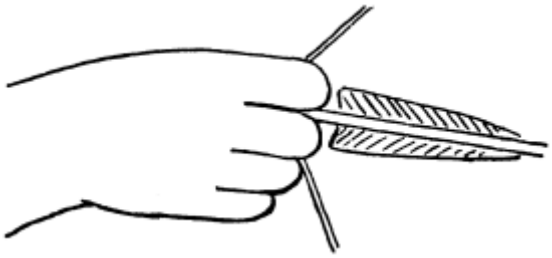


図 18　アッシリア人

先に述べたように、いくつかの例外を除いて、アーチャーが押し手を観察者の方に向けている地中海リリースには、2 つの種類がある。1 つは 3 本の指が弦の上にあるもので、もう 1 つは添付の図（図 19）に示すように、2 本の指だけが弓を引いているものである。

図 19　アッシリア人

地中海式は、紀元前 884 年にはアッシリアの彫刻に見られ、大英博物館に所蔵されている、アスルナジルパルによる都市包囲を表現した大理石の板に描かれている（図 20）。

図 20　アッシリア人

図 21　アッシリア人

図 21 は、戦車に乗ったアスルバニパルがライオンを撃っているところである。下の弦はアーチャーの腕で隠されている。弓を持つ手に関して、親指はまっすぐで、矢を導くように表現されることもあれば、弓の内側に支えられたように表現されることもある。これに関連して、アッシリア最古の弓では、弓の末端はまっすぐで柔らかく、ノック(訳者注:リムチップ溝のこと)は単純な溝であり、弦は現代のインドやアイヌ(Aino)の習慣のように、弓を使用するたびに結ばれていることに注目すると興味深いかもしれない。この時代の他の弓は、ノックがやや斜めになっており、現代のイギリス弓のように、はじめから弦を輪にしてノックに通していた可能性がある。B.C.650 年以降のスラブでは、弓の両端は急に曲げられており、曲げられた部分には鳥の頭が彫られているものもある。この弓を張るとき、弦に永久的なループがすでにあり、アーチャーが弓の端を自分の方に引き寄せると同時に、膝を弓の真ん中に押し付けて弓を曲げる間、このループをノックの先端に滑り込ませるには、もうひと

りの助けが必要です。(図 22)

図 22

以前の時代では、矢はより大きなノックと細長い鏃で表現され、そのエッジは一般的にシャフトに平行です。先に述べたように、矢の矢尻は球根状であり、これが正しく表現されていれば、プライマリ・リリースが意図されたものであるかどうかの疑問が解決されるであろう。後期のスラブでは、矢の鏃は短く、ベインは先に向かって細くなっており、ノックは球根状ではない。弓矢の時代による変化については、私がこれらの彫刻について行ったよりも、もっと注意深く研究すれば、ここで述べた一般的な記述を修正できるかもしれない。

古代エジプト人の弓の練習について、ウィルキンソンは彼の古典的な仕事の中で、2 つのフォームのリリースにのみ言及しています。「彼らの弓の引き方は親指と人差し指、または人差し指と中指のどちらかであった」と述べている[5]。ローリンソン(Rawlinson)も同じことを言っている[6]。彼らが言及した 2 つの形式は、プライマリと地中海リリースであろう。

ロザッリーニやレプシウスなどが示す古代エジプトの墓に描かれた絵やフレスコ画の表現に依拠するならば、古代エジプト人は少なくとも 3 つ、場合によっては 4 つの明確に違うリリースを実践していたことになる。

これらの古い彫刻やフレスコ画に描かれているリリースの多くが、伝統的な単純なものであることは疑う余地がない；実際、いくつかのリリースは明らかに不可能であり、アーチャーが 2 本と親指の極端に硬い弓を優雅に引いている姿はその典型である。また、ラメセス 2 世（ Wilkinson, Vol. I. , p. 307 を参照）の図、弓を垂直、引き手を反転、つまり、手のひらを上に引くことも同様に不可能な姿勢です。他のリリースは、すでに説明した形と明確に一致しており、従来の形の解釈に若干の幅を持たせることで、これらをそれぞれ

---

[5] Manners and Customs ofthe Ancient Egyptians, 2nd series, Vol . I. , p . 207.

[6] History of Ancient Egypt, Vol . I. , p . 474.

の型に属するものとして特定することができる。最も古いリリースは、ウスルタセン 1 世の時代のベニ・ハッサンの墓に描かれたもので、レプシウス教授の保守的な年表によれば、紀元前 2380 年のものである。

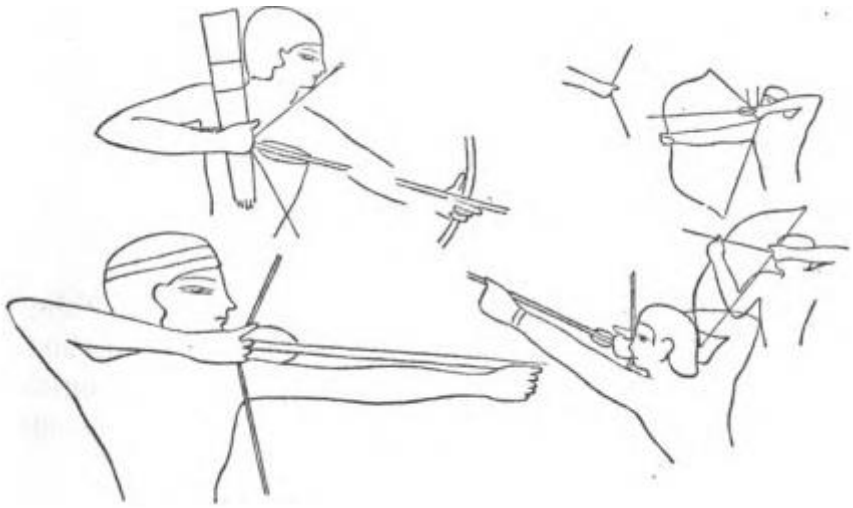


図 23　初期エジプト人

図 23 はロザッリーニの大著から複写したものだが、これらの墳墓から出土したものでリリースの形態を最も明瞭に示している。これらの図では、矢が耳元に引かれていることと、アーチャーが右手だけでなく左手でも射るように表現されていることが興味深い。千年以上の歩みを経て、セティ 1 世（紀元前 1259 年）の時代になると、矢の放ち方と矢を耳の上と後ろに引く方法が表現されるようになる。(図 32)

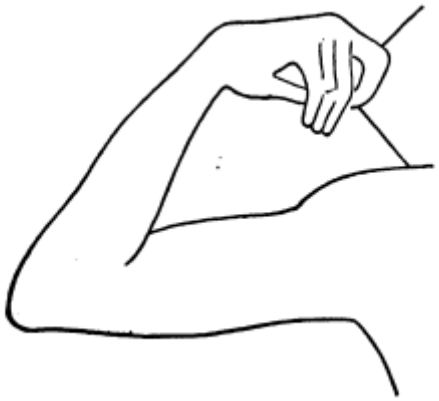


図 24　エジプト人　セティ I 世

確かに、手の構えは、親指と人差し指を曲げているように解釈されるかもしれないが、図にあるような自由で勢いのある弓の引き方は、どのような強さの弓でも、ピンチタイプ

ではありえない。モンゴルと日本のアーチェーが取る姿勢は、セティのこの絵を鮮明に思い起こさせる。エジプト学者によると、セティ 1 世は治世の初期に東方での戦争とアジア民族の侵入に抵抗することで精一杯であった[7]。セティの絵に描かれている方法がどのようなものであったにせよ、それはウスルタセンの時代のリリースとはまったく異なっており、よく描かれるラメセス 2 世の姿とも異なっている。また、よく描かれるラメセス 2 世の像とも異なっている。ロザッリーニから複製された図 25 では、親指と人差し指が部分的に曲げられているが、これはプライマリ・リリースを意図したものである可能性がある。曲がった人差し指とまっすぐな親指が矢の先端を持ち、他の 3 本の指は弦から自由になっているのは、他に解釈のしようがない。

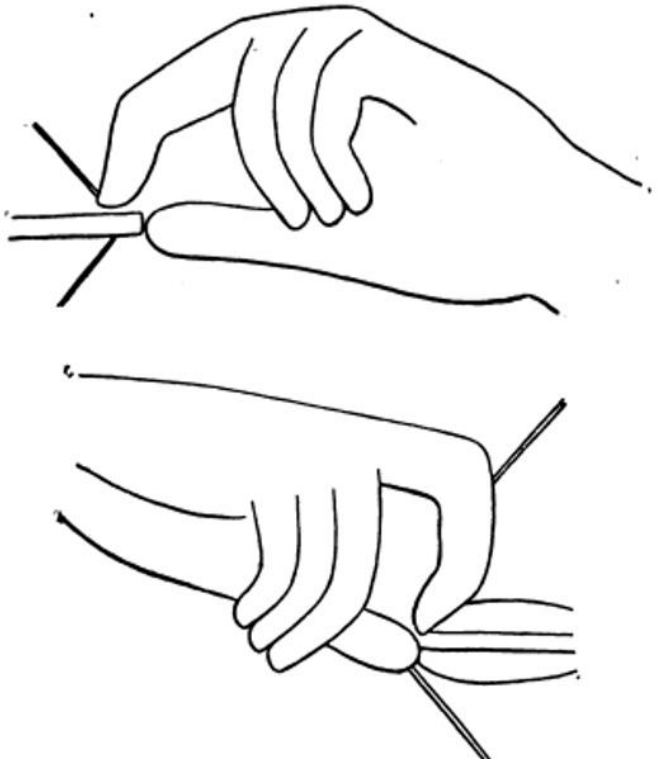


図 25　エジプト人 ラメセス 2 世

大英博物館には、狩猟シーンやラメセス 2 世時代の戦闘シーンの鋳物があるが、押し手の位置が逆位置にある。垂直の弓に関連付けられたリリースのこのフォームは不可能なものだ。どちらかの手が間違って描かれている、または弓の傾きが正しくありません。この矛盾の唯一の説明は、弓が本当に水平の位置に保持され、ターシャリ・リリースだったとい

---

[7] 古代エジプトの遺物の中から、サムリングの目的に合致するものが今後発見されるかどうかを知ることは非常に興味深いことになる。

う仮定です。エジプトの画家は、遠近法を知らず、弓を短く描くことがまったくできないため、弓を垂直に描いている。その証拠に、北米インディアンの部族やシャム族は、弓を水平に構えている。このことは、添付の図を見れば明らかであろう。図 26 は、大英博物館で参照された鋳型からコピーしたものである。図 27 は Wilkinson, Vol. I. , p. 307、図 28 は Wilkinson, Vol. 1. , p. 309.

図 26　エジプト人

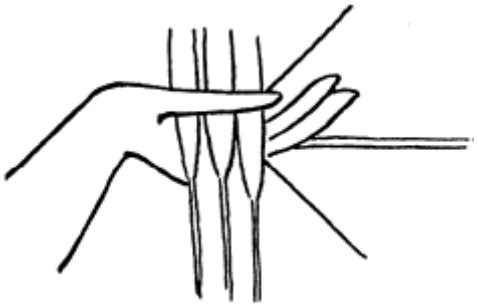


図 27　エジプト人

図 28　エジプト人

大英博物館のレジナルド・スチュアート・プール氏のご好意により、古代エジプトの矢のノック・エンドのアウトラインを送っていただいた。図 29、図 30、図 31、図 32 は Rosallini からコピーしたものです。図 29 はおそらプライマリ、図 30 はおそらくターシャリ、図 31

と 32 は地中海リリースの形である。

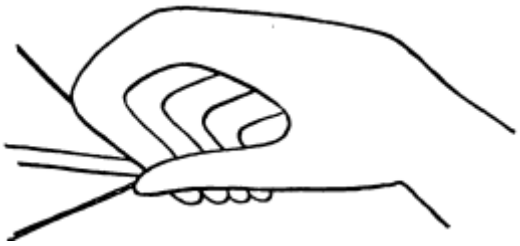


図 29　エジプル人

図 30　エジプト人

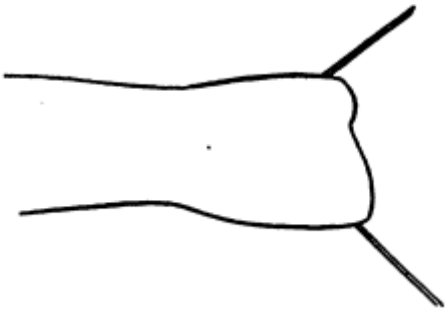


図 31　エジプト人

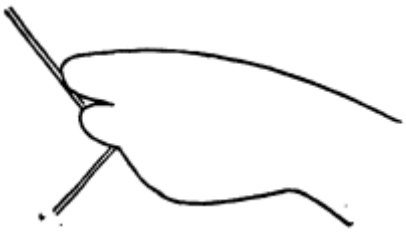


図 32　エジプト人

次に、古代ギリシャ人の弓術の練習に目を向けると、少なくともこの人々の間では、射るときの手の姿勢について、最も明確で真実味のある描写が見られるはずである。ハンサードは「弓術の書」428 ページで、古代ギリシャのアーチャーについて、「現代のトルコ人、ペルシャ人、タルタル人、その他多くの東洋人と同じように、彼らは親指で弓の弦を引き、矢は人差し指で所定の位置に保持した」と述べている。公私のコレクションに現存する多くの彫刻、特に現在英国哲学文学博物館に所蔵されているエギナ島出土の見事な鋳物は、私が述べたように弓の弦を引く数人のアーチャーを表現している。

岩石彫刻や装飾壺に描かれた古代ギリシャのリリースを調べてみると、モンゴル式と思われるものはただ一つ、『Auserlesene Vaserbilder』所収のギリシャの壺に描かれたもの（赤地に黒文字）だけである。この例外を除けば、これまでに調査されたリリースは、古代エジプト人に見られたものと同様、多種多様で、その多くは極めて謎めいている。ハンサード氏が言及したアテナ神殿の彫刻について、私は長い間頭を悩ませたが、その正確さは認められていたものの、このリリースは不可能なものであるという結論に至らざるを得なかった。この彫刻がトヴァルセンによって入念に修復され、修復された部分は手と腕、そしてほとんどの人物の四肢に及んでいることを知ったのは、それからしばらく経ってからのことだった。この情報をもとに、私はこれらの人物の歴史を調べてみた。すると、ロバーツ・ブロス社からわが国で再出版された『トヴァルセンその生涯と作品(Thovaldsen his Life and Works)』と題されたユージン・プロンの著作に、次のような記述があった。修復された部分の中には、アーチャーの手もあった。「その彫像はパリアン大理石製で、彼は新しい作品の色合いを合わせるのに、慣れた目を欺きそうなほど細心の注意を払った。アトリエを訪れた人たちから、どれが修復された部分なのかとよく尋ねられた。印をつけるのを忘れていて、もう覚えていないんだ。できることなら、自分で探してみてください」(p. 56)。

しかし、これらの修復については、ハンサード氏が気づいていなかった可能性がありますが、これらの図に表されている方法で弓を引こうとしたことがあれば、その不可能性に気づいたでしょう、さらに、モンゴル人のリリースに少しでも精通していれば、満州人、韓国人、日本人、トルコ人が採用しているような形にはまったく近くないことがわかっただろう。

図 33　トヴァルゼンのリリースの復元

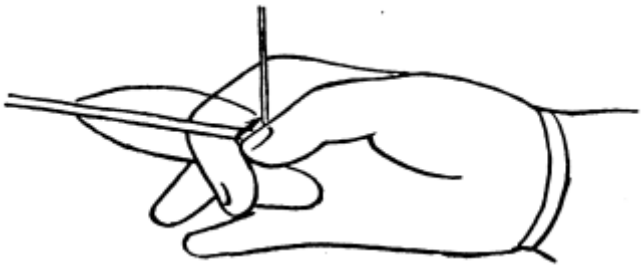


図 34 アマゾンのアーチャー

図 33 は、ボストン美術館に所蔵されている一連の鋳物からスケッチしたものである。これらの図を見てみると、弓手に対する軸手の角度も不正確であることがわかるだろう。一見するとモンゴル式を示唆すると思われるリリースは、紀元前 4 世紀のギリシャの壺に描かれたアマゾンのアーチャーを表す図 34 に示されています。人差し指は親指の先を握っているように見えますが、親指は本来あるべき弦に引っ掛かっていません。この推測は、フィガリアのアポロ・エピクリウス神殿の彫刻（図 35）と、小アジアのリキュア地方の彫刻（図 36）によって裏付けられている。これら 2 つの例では、手は弓を引く姿勢で、指は弦の上で部分的に曲げられ、親指は矢を支えるのを補助しているように見える。

図 35　フィガリア

図 36　リキュア

私が見た中で最も古いギリシャのものは、アソス博覧会からこの国に送られた石の塊で、現在はボストン美術館の所有物となっている。紀元前 2200 年頃のものと思われる。

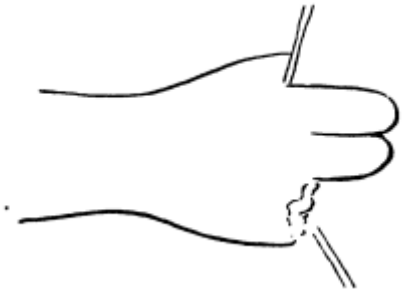


図 37　アソス

この図では、手は勢いよく弦を握っており、人差し指と中指は急に曲がっている。(図 37)。しかし、私の知る限りでは、これは特殊な条件下でのみ使用される一時的な方法であるようだ。例えば、弓の硬さをテストするとき、弦をこのように握る。アッシリアの石板のひとつに、王が弓を試し引きしている場面が描かれている。ズーニの酋長から聞いた

話では、大急ぎで弓を射るときは、弦を 3 本か 4 本の指で力強く握り、矢は親指で人差し指に当てるのだという。蝦夷の西海岸に住むアイヌ族も、大急ぎで矢を射るときは、まさにこのように弦を握るのだと教えてくれた。どのような強さの弓を使う場合でも、弦が指にかかる負担は非常に大きく、このような弦の摩擦に耐えられるのは、動物の前足のように丈夫で、完全に硬くなってしまった手だけである。参照の便宜上、この形式を仮にアルカイック(古代の)・リリースと呼ぶことにする。ヘラクレスが弓を引いている様子を表現した大理石の浮き彫りは、レイエの『Monuments de l'Art Antique』(古美術のモニュメント)に掲載されている。この作品の制作年代は紀元前 4、5 世紀とされている。アルフレッド・エマーソン博士は、『アメリカン・ジャーナル・オブ・アーケオロジー』誌の第 1 巻 153 ページで、この作品は現代の詐欺であるとの考えを表明している。同誌の次の号で、フルトヴェングラー氏はこの作品を擁護しているが、紀元前 1 世紀より前ではないとしている。この作品が本物か偽物か、私には判断する能力がない。

しかし、あえて言わせてもらえば、引き手の姿勢は非常に不正確である。初期のギリシャの作品では、手の描き方がいかに不合理であっても、弓の曲がり具合や弦のテンションによってできる角度との関係で、矢を正しく調整することを怠ることはなかった。しかし、このヘラクレスの浮き彫りでは、矢を射る姿勢が、これほど頑健で正しい身体とポーズを作ることのできる画家が犯すことはないほどで、この作品の性質についてエマーソン博士が立てた仮説に重みを与えている。

図 38　ギリシャ

図 38 は Weiner Vorlage Blätter, Series D, Taf. IX, XII.から複写されたものです。この図は、初期ギリシャの壷によく見られる、伝統的な矢の放たれ方はグロテスクでさえあることを示すものとして興味深い。左は手の向きが逆で、親指が上ではなく下にある。このように矢を射ることは可能であるが、これほどぎこちなく不自然な姿勢をとるとは考えにくい。このリリースはターシャリ・リリースを表すものである。右は不可能なリリースであるが、このリリースもターシャリ・リリースを意図している。親指はまっすぐで、矢は親指と人差し指の間に挟まれ、中指・薬指と小指は弦の上にある。

Monuments Inedits. , Vol. I. , Plate LI. ,には、紀元前 6 世紀初頭に作られたとされる有名なカルキスまたはアキレウスの壺が描かれています。ここでは、アーチャーは左利きで示されています。この絵が正しいと仮定すると、このリリースは古代の形を表していることになる（図 39)。

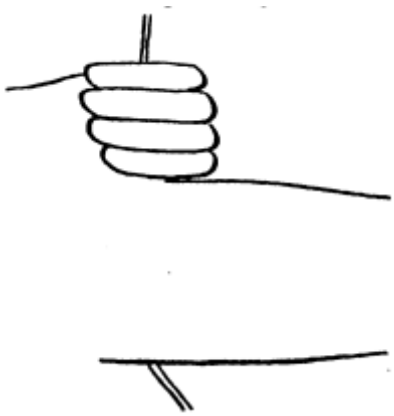


図 39　ギリシャ

図 40　ギリシャ

同じ巻に描かれた別のリリース(プレート xx)もターシャ・リリースを表すことを意図している可能性があります(図 40)。同著の別のプレート(L. , Vol. II . ,)には、紀元前 4 世紀のグレシアの壺が描かれており、そこにはおそらくターシャリ・リリースと思われる 2 つのリリースが描かれている（図 41)。

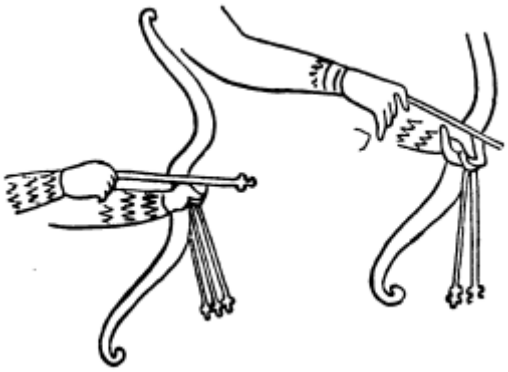


図 41　ギリシャ

図 42　エトルリア

第II巻のプレート L. には、紀元前 4 世紀のギリシャの壺が描かれ、そこにはおそらくターシャリ・リリースと思われる 2 つのリリースが描かれている（図 41)。同じ巻のプレート XVIII.には、エトルリアの古代の壷が描かれており、そこには弓を射る人の不思議な姿が描かれている。押し手は非常によく描かれており、矢を放つための機械的な装置が、引き手の不思議な表現によって意図されているのではないかと想像してしまうほどである（図 42)。

図 43　左　ギリシャ　右　ギリシャ(浅浮き彫り)。

図 44　ギリシャ

図 43 と 44 には紀元前 6 世紀のものとされるギリシャの壺(赤地に黒い像)から模写された 3 つの興味深い作品が見られる。これらはすべて、誤って表現されていますが、おそらくターシャリ・リリースを意図しています。

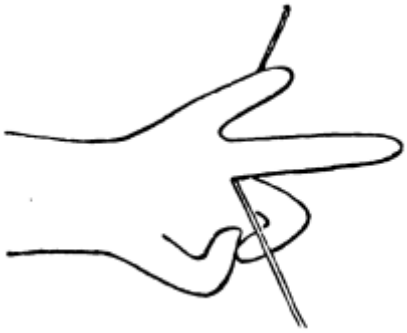


図 45　ギリシャ

図 45 は、紀元前 6 世紀のギリシャの壺を描いた『Auserlesene Vaserbilder』に描かれた図からコピーされたものである。この中で、間違いなくモンゴル式を示唆している。親指が弦の上に掛かっていないのは事実だが、中指とおそらく人差し指が弦を押さえるように曲がっている。

図 46　ペルシャ

古代ペルシャのリリースに関しては、2 つしか見つかっていない。ひとつは紀元前 5 世紀、サッサニ朝時代の銀製の杯である。これは、Monuments Inedits. , Vol. III . , Plate 51 に

描かれている。この図の弓は典型的なモンゴル弓である。リリースは間違いなくモンゴルリリースのひとつであり、中指と薬指は親指を補助し、人差し指はまっすぐで力がかかっていない。手には革製の奇妙な装備があり、手首にバンドで固定されているようだ。これが日本人が使っているのと同じような指と親指をガードする弓懸なのかどうか、判断するのは難しい。(図 46)

ベンガル王立アジア学会の会誌 VII. 第 1 部、258 ページ、1883 年に、A. カニンガム少将からの連絡がある。「金、銀、銅の古代ペルシャの遺物」と題されている。これらの遺物はオクサス川の北岸で発見された。硬貨から判断して、著者は紀元前 180 年か 200 年以降に堆積したものと見ている。遺物の中には石の円柱があり、そこには 2 人のペルシャ兵が 2 人のスキタイ人を捕らえている様子が描かれていた。手の表現は不完全で、どのようなリリースを意図しているのか正確に判断することはできない。しかし、いずれの場合も、手の姿勢はモンゴル式を示唆している。弓は短く、今日のモンゴルの弓に似た形をしている。興味深いのは、スキタイ人は左利きで弓を射るように表現されていることである。このことに関連して、プラトンが弓術に関してアドバイスしている「両手で弓を引くことを教えるべきだ」という言葉を思い出すと、スキタイ人はどちらの手でも弓を引くと付け加えている。

古代の中国の弓術に関しては、中国の古典には弓術に関する記述が多く、今日行われているリリースが 3,000 年前に行われていたリリースと同じであることは疑う余地がない。孔子の論語、中庸の教義、および他の古代の著述は、この男らしい芸術が高く評価されていたことを十分に証明している。中国古代の詩集『詩経(the Shi King)』(レッジ訳) には指抜き(thimble)、パンチ(a pán chí)、フィンガーレギュレーターとも呼ばれた親指の指輪の使用について、次のような記述がある。

"弓矢の指ぬきを帯に掛けていた"

そしてまた、

"それぞれの右手の親指には金属製のガードをつけていた"

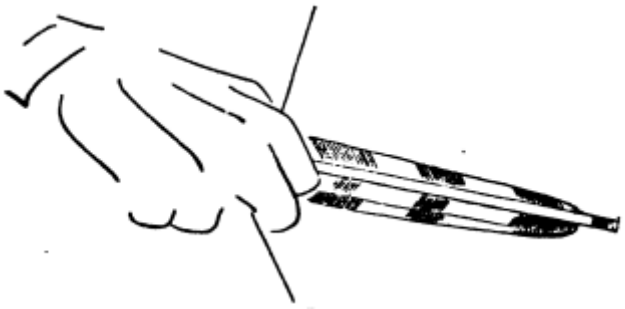


図 47　日本

過去の時代の日本のアーチェリーの射法について、私たちが持っているわずかな証拠は、モンゴル・リリースを指している。弓は、常に日本の芸術家のお気に入りで、弓矢やアーチャーについての詳細は、古い絵画や図面から得ることができます。弓矢を射るときの手の表現は、伝統的に描かれることが多いが、モンゴル式で矢を放つと簡単に解釈できる。図 47 は、力強いく描かれた絵から写したもので、矢を放つときの手の姿勢を示している。宮島の神道寺院には 200 年以上前の絵があり、そこではアーチャーの手がモンゴル式で描かれている。700 年前の Keion の絵では、弓を射る人が手の人差指と中指の先を舐めて濡らしている様子が描かれている、これはモンゴル式の日本型を示唆している。

奈良の天皇の宝物の中に、天平神護（西暦 765 年）のものと思われる銀製の容器(訳者注:正倉院南倉の銀壺か)があり、そこには狩りの場面が描かれている。ここに描かれているのは、正しく描かれているとすれば、地中海型である。弓はモンゴル式。器はおそらくペルシャ製で、日本製ではないことは確かだ。日本の弓術への最古の言及は、その翻訳者であるバジル・ホール・チェンバレン氏(Mr. Basil Hall Chamberlain)がいうように「古事記(Records of Ancient Matters)」に収められており、「これは、ツラン、スキタイ、アルタイなど、様々に呼ばれてきた人類の大きな区分の最古の本物の文学作品であり、非アーリア系インドの現存する最も古い文学作品に少なくとも 1 世紀先行している。」「これらの記録は、間違いなく 7 世紀にまで遡る。この作品では、矢(heavenly feathered arrow,)、植物性のはぜのきの弓、鹿弓、そして肘当てについて言及されている。弓道において、肘当てがどのような用途で使われるのか、古代の弓の使い方と現在の日本の弓の使い方が同じだと仮定すると、理解に苦しむ。肘のパッド(訳者注:鞆のことか)は、弦の弱い衝撃からその部分を保護するために必要であったとは考えにくい。肘を囲むアームガードのようなものであったとすれば、モンゴル式に強く張った弓をしっかりと持ち、日本式のように弓が回転しないようにしたのではないかと推測される。

日本のアーチャーによって弓に与えられた独特のねじれは、私の知る限り、アーチェリーの世界ではユニークです。シャムでは、不思議な構造の弓は、粘土のボールを投げるために

使用されます。玉は網に入れられ、弓の弦は二重になっている。弓を持つ手は、親指を弓の内側に垂直に当て、玉が飛ぶのを妨げないようにする。弓には独特のひねりが加えられており、ボールは弓から放たれる。しかし、奈良の天皇の宝物館には、1000 年近く前の不思議な弓が保存されている。玉を入れる網の代わりに、穴のあいた革の部分がある。この部分は、弓の 3 分の 1 の位置、アーチャーが矢を放つ位置で紐に調整されている。日本のアーチャーがこの不思議な弓の回転を取り入れたのは、羽の側面との摩擦から保護するため、または弦の痛みを伴う衝撃から逃れるため、または、可能性はありませんが、ボールを投げる弓として使用するためなのか判断することは困難です。

インドのさまざまな部族が行っているリリースについては、私には情報がない。ジェイムズ・ファーガソン氏のご好意で、彼の膨大なインド寺院の写真コレクションを拝見させていただいた。コインバトール近郊のペロール寺院では、八臂の神が右手の人差し指と中指の間に矢を立てて持っているように表現されている。このような姿勢で放たれた矢の形を推測することはできないが、この姿勢で矢を弦につないだのであれば、地中海式のリリースが示唆されるだろう。

マイソールのハラビード寺院の南西面には、矢を放ったアーチャーが描かれている。カラマプール近郊の廃墟となった小さな寺院、ヴァルコンダでは、弓矢のアーチャーはすべての指の先端を弦の上に置いており、後のアッシリアのリリースと同じ位置にある。これらのデータは、これらの人々のリリース形式またはフォームを決定するにはあまりにも少ないし、あいまいです。

アメリカにおける古代のアーチェリーの方法については、ほとんど語ることができない。おそらく最も信頼できるデータは、征服時のカトリック教会による衝撃的な冒涜を生き延びた数少ないメキシコの記録にある[8]。

キングスボローの "Mexican Antiquities "のプレートを見てみると、弓矢で武装した狩人や戦士が多数描かれている。図版は粗雑に描かれていて、動作中のものは引き手の描き方が稚拙で、ほとんどの場合、リリースを確認するのは難しい。引き手の姿勢がはっきりと描か

---

[8] 教会の代表者たちの猛烈に不寛容な精神は、1531 年 1 月にメキシコの主任異端審問官スマラガがトロサのフランシスコ会支部に宛てて書いた手紙の言葉によってよく示されています。「非常に尊敬する父よ、私たちが異教徒を改宗させる仕事で非常に忙しいことをあなたに知らせます。そのうち、神の恩寵により、100 万人以上の人々が、私たちの熾天使の父、聖フランシスコの修道会の兄弟の手によって洗礼を受けました。500 の寺院が地面に倒され、彼らが崇拝していた 2 万以上の悪魔の像が粉々に砕かれ、燃やされました。」—メキシコの征服者による偶像破壊の例、W.H.ホームズによる。

れている数少ない絵では、おそらくターシャリ・リリースが示されている。ゼリア・ナットル・ピナール夫人に、Atlas Duran, Plate 1., と Mappe Quinatzin 1, Plate IV.から弓兵のトレースを提供していただいた。これらは、キングスボローのものと同じように曖昧ではあるが、ターシャリ・リリースを表しているとしか解釈できない。後者の著作では、第 II 巻の第 90 図と第 93 図に、明らかに地中海式リリースが描かれており、もしこれらの人々がターシャリ・リリースを実践していたと信じるに足る理由が他になければ、地中海式リリースも実践されていたと考えられるだろう。その理由は、第一に、すべてのケースで、矢は胸、またはさらに下に引かれている、第二に、第二に、より重要なことは、アーチャーが右手で観察者に向かって示されるとき、矢は押し手の下にあります。一方、アーチャーが観察者に向かって左手で示されている場合、矢は押し手の上にあります。弓は垂直、多くの荒っぽい初期の絵のように表されますが、作者は、弓を短く水平に表現することができず、手に対する弓の位置を維持することで、無意識のうちにターシャリ・リリースの姿勢を示しているかもしれない

地中海式リリースには 2 つの形式があり、1 つは 3 本の指を使うもの、もう 1 つは 2 本の指を使うものである。イギリスの権威によれば、2 本の指で弓を引くことに慣れれば、よりよいリリースが得られるという。これらの 2 つのフォームの違いはわずかなように見えるが、実際には今日ヨーロッパとアメリカのアーチャーは 3 本指でドローイングします。しかしそれは明らかに、数世紀前のヨーロッパではそれほど普遍的な形ではありませんでした。現時点では、私たちが見てきたいくつかの例から判断すると、アーチャーはほとんどの場合、2 本の指でドローイングしているように描かれているからだ。

初期の作品には、弦に 3 本の指をかけるのが正しいリリースだと書かれている。しかし、私たちがアクセスした数少ない彫刻、象牙の彫刻、エッチング、写本、ドローイングなどは、ほぼ例外なく 2 本指のリリースを描いています。後年、弓が硬くなり、曲げるのに 3 本の指が必要になったのか、それとも(より可能性の高い)指が弱くなり、より多くの指が必要になったのかは興味深い関心です。

これらの初期の作品において、採用されているリリースの方法が統一されており、サクソン人、ノルマン人、フレミング人、フランス人、イギリス人、スカンジナビア人、イタリア人が基本的に同じリリースを実践していたことは興味深い。

ハンサードは(「" Book of Archery」p.77)「13 世紀、14 世紀、15 世紀の彩色写本に見られるアーチャーの描写はすべて、古代のものと現代のものとを同一視している。薔薇戦争の間、多くの王を追い立て、滅ぼしたウォリック伯爵の伝記作者であり、弓の名手でもあったジョン・ド・ルースのペン画は、好奇心旺盛な人々に娯楽と情報を与えてくれるだろう。弓

に対して頭と首に必要なわずかな傾き、2 本指と 3 本指を使ったドローイングが正確に描写されている。これらは大英博物館の写本の中にある。ハンサードによれば、アシャムはアーチャーの手袋を 3 本の指で作るように命じた。彼は弓兵を前にして、フランス兵の 3 本の指を切断し、彼らにこれ以上、人や馬を斬ることができないようにすると誓った[9]。

私が出会ったイングランドで最も古いアーチェリーの図は、コットン図書館に所蔵されているサクソン写本から写されたものである。これらの写本は 8 世紀のものである。Strutt の "Sports and Pastimes "に掲載されている木版画が正しければ、手の構えは 3 本指の地中海式リリースをはっきりと示している。弓は短くて太く、ローマの弓のようなリカーブしており、そこから自然に派生したのかもしれません[10]。

以下の例は、主に博物館の本、彫刻、象牙の彫刻、複製などから派生した、この分野の非常に性急で不完全な調査で私の注意を引いたものです。有名なバイユー・タペストリーは、その複製がサウス・ケンジントン博物館で見ることができるが、アーチャーたちは 2 本指の地中海式で描かれている。また、以下の作品にも例外なく 2 本指の地中海式が描かれている。1492 年、スウェーデンのクムラ教会のフレスコ画；ソメラードの「中世の芸術」（第 5 シリーズ、プレート XXVII ）に描かれたアルブレヒト・デュラーの木彫りの人物像（第 10 シリーズ、プレート XXV ）；10 世紀か 11 世紀のものと思われる象牙のチェスの駒；メイリックの「古代の鎧」（プレート VIII. ）、アミアンの大聖堂の扉口にある 11 世紀のノルマン人の像、その鋳型はトロセデロ美術館で見ることができる。最後に、ボストン美術館には 15 世紀前半のフィレンツェの彫像が多数あり、これらはいずれも地中海式の二本指のタイプの多様性を明確に表している。ヴェズレーのマドレーヌ教会の扉には、地中海のリリースの奇妙な形が描かれており、その鋳型はトロセデロ博物館で見ることができる。このリリースでは、アーチャーは 4 本の指をすべて弦にかけ、矢は中指と薬指の間に持っている。しかし、ジェームズ・スティーブンソン大佐は、北米のナバホ・インディアンのリリースについて説明してくれた際に、この 4 本指のリリースと同じ方法を図示してくれた。

結論として、これまで述べてきたすべてのリリースが、歴史上最も古い時代から行われてきたということは興味深い。各リリースには、バリエーションがないプライマリ・リリース

---

[9] メイリックは、その有名な著作『"Ancient Armour" (Vol. I., p. 9）』の中で、イングランドにおける弓の起源について、次のように述べている：「戦争の武器としての弓は、確かにノルマン人によって導入された。サクソン人は、現在のタヘイト人と同様に、単に鳥を殺すためにそれを使用しました。そのため、ハンチントンのヘンリーが戦いの前に口にした演説で、彼はサクソン人を矢さえ持たない民族として汚名を着せた。」

[10] ローマ初期のリリースに関する資料を調べる機会がなかったのでここで述べておく。トラヤヌス帝のコラムには、地中海形式のリリースがいくつか示されています。

を除いて、1 つ以上のバリエーションがある。セカンダリ・リリースは、中指、あるいは中指と薬指を弦の上に置く。インドやアッシリアには、すべての指が弦にかかるような形のリリースもあるが、これらが正しく表現されているとは考えにくい。ターシャリ・リリースでは、人指と中指、あるいは人指、中指、薬指が弦にかかる。地中海式リリースは、2 本または 3 本の指、そして 2 つの例ではすべての指が弦の上にある。モンゴルのリリースは、中国やモンゴルのように人指のみが補助することもあれば、韓国や日本のように人指と中指が補助することもある。そして、P161(訳者注:製本前のページ数)で記述されているモンゴル式リリースがどこかで確立された形式なら、モンゴル式とセカンダリが混在していることになります。

ある民族におけるリリースの文化的持続性は、アイヌ族のケースによく表れている。何世紀もの間、アイヌ族は日本人と戦い、敵の優れた弓術に心を砕いてきたに違いない。実際、おそらく北部のカムチャダル族を除いて、アイヌはモンゴル式のリリースを実践する民族に囲まれてきたが、それでも彼らの原始的な射法を守り続けてきた。リリースの効率と強さはさまざまである 2 つの最も強力で、おそらく同じくらい強力なリリースは、地中海とモンゴルです。そして、歴史上、広範囲を支配した 2 つの大きな文化が、地中海諸国とモンゴル人であるという事実も興味深いです。

少なくとも 3 千年か 4 千年前から、それぞれの民族は独特の矢を放ち、それはあらゆる時代の変遷を経て今日に至っている。言語、風俗、習慣、宗教は、何世紀にもわたって、この 2 つの大きな分派を広く国家に分離してきた。しかし、弓から矢を放つという、一見些細で単純な行為は変わっていない。現時点では、ヨーロッパとアジアのアーチャーの射法は、それぞれの遠い祖先の特徴を引き継いでいる。

資料は不足しているが Moseley は、ペデスリーアーチェリーとして言及している独特の射法について言及している。南アメリカ、中国、アフリカのような世界の広く分離された部分で、弓を足でドローイングする記録の問題です。1792 年のウォルター・マイケル・モーズリーによる「弓術論(Essay of Archery)」の中で、この著者は次のように述べている：「エチオピア人が足で弓を引くことは、古代の著述家によって記録されている」、またクセノフォンはカドゥキア人について次のように述べている：「彼らは長さ 3 キュビトの弓と 2 キュビトの矢を持っていた。これらの武器を使うときは、左足を弓の底に置き、その方法で矢を激しく射た。」

アラビア人についても、足の助けを借りて、上記の方法で弓を使ったと記録されている。ここれらの場合のリリースは、最も強硬な性質のものでなければなりません。いくつかの記述では、アーチャーが仰向けで、両足を弓に支えているように表現されている場合、弦はお

そらく以前にアルカイックと定義したリリースのように両手で握られているのでしょう。

以下は分類されたリリースと実践される場所・民族のリストである。地中海とモンゴルのリリースは、早い時期に始まったが、常に文明化された支配的な人種を特徴づけてきた。この一般化の例外は興味深い。地中海のリリースを実践するリトル・アンダマン諸島の人々と、ターシャリ・リリースを実践するグレートアンダマン島の住民はその実例である。

地中海式を実践しているエスキモーのさまざまなグループが、そして私の知る限り、このリリースのために矢を明確な形を設計した唯一の人々であるという事実も興味深い。エスキモーを丹念に研究しているジョン・マードック氏は、エスキモーのある種の技術は、スカンジナビアの入植者を通じてグリーンランドから伝わったものではないかという推測を私に述べた。弓がほとんど使われず、小鳥や狩猟にしか使われない部族では、弓のリリースが弱いか、不規則であることを示しているかもしれない。しかし、このことに関して結論を出すには、データが少なすぎる。

この論文で言及されている部族と国家の分類リスト

現代				
プライマリ・リリース				調査手法
蛮人				
	蝦夷	アイヌ		観察
	南米	デメララ		出版物
	北米	ナバホ		報告
	北米	チペワ		報告
	カナダ	ミクマク		報告
	北米	ペノブスコット		観察
	北米	ユート		写真
セカンダリ・リリース				
蛮人				
	北米	オワタ		観察
	北米	ズーニ		観察
	北米	チペワ		報告
ターシャリ・リリース				
蛮人				
	北米	オマハ		観察
	北米	スー		報告
	北米	アラパホ		報告
	北米	シャイアン		報告
	北米	アシニボイン		報告
	北米	コマンチ		報告
	北米	クロー		報告

	//	ブラックフィート		報告
	北米	ナバホ		報告
	島民	グレートアンダマン		出版物
文明人				
		シャム人		観察
地中海式				
文明人				
		ヨーロッパ諸国		観察・出版物
蛮人				
	エスキモー	ポイント・バロー		報告
	エスキモー	カンバーランド・サウンド		出版物
	エスキモー	東シベリア岬		出版物
	島民	リトル・アンダマン		出版物
モンゴル式				
文明人				
	中国	満州		観察
	中国	広東		観察
		朝鮮		観察
		日本		観察
		トルコ		出版物
		ペルシャ		出版物
不規則				
	スマトラ	テミアン		観察
古代				

プライマリ・リリース				
文明人				
		アッシリア初期		
		エジプト		
		ギリシャ?		
セカンダリ・リリース				
文明人				
		アッシリア後期		
		インド?		
ターシャリ・リリース				
文明人				
		エジプト		
		ギリシャ		
		メキシコ?		
地中海式				
文明人				
		アッシリア後期		
		エジプト前期		
		アラブ		
		インド		
		ローマ		
中世				
		イギリス		
		フランス		
		ノルマン		
		フランドル		
		サクソン		

		スウェーデン		
		フィレンツェ		
モンゴル式				
文明人				
		中国		
		スキタイ		
		ペルシャ		
		エジプト?		
		ギリシャ?		
		ペルシャ		
アルカイック?				
文明人		古代ギリシャ		

アーチェリーの射法とアーチャーの道具について、これまで以上に体系的に研究することの重要性を喚起する必要はないが、図面、岩の碑文、フレスコ画、浮き彫りなどをコピーする際にもっと注意する必要性を指摘します。手の位置、弓矢の先端の形や特徴、羽の形など、細かな点に注意を払う必要がある。さらに、古代の物や絵の中から、アームガード、サムリング、アローレストなどを識別する可能性と重要性も指摘したい。また、旅人や探検家は、弓矢を使うという単純な事実を観察するだけでなく、(1)引き手の姿勢、(2)弓を垂直に持つか、水平に持つか、(3)矢が弓の垂直の右側にあるか、左側にあるか、(4)この論文ではコメントしていないが、余分な矢を押し手に持つか、引き手に持つかを正確に記録する必要がある。弓を支える方法も重要である。様々な民族の間で、矢の放ち方の特定の形式が顕著に残っていることから、過去の民族の血縁関係を特定する上で、弓の使い方が関係を立証したり、反証したりするもう一つのポイントになるのではないかと考えている。矢の放ち方の特徴や制限をより確実に知ることで、手を表現した彫刻の断片の年代や性質について、別の手がかりが得られるかもしれない。アーチャーの独特な姿勢は、腕のない彫像の解釈につながるかもしれない。私は部族や民族の矢の放ち方に関するいかなる情報にも感謝したい。特に、セイロンのヴェッダ族、インドの山岳部族、アフリカ、南米の部族、そして特にフエガン族が行っている矢の放ち方を知りたい。実際、世界のどの地域の矢の放ち方に関する情報でも構わない。そのような資料は、説明、写真、図面、可能であれば弓矢の標本などの形で、マサチューセッツ州セーラムのピーボディ科学アカデミー（Peabody Academy of Science）の著者に送ることができる。その場合、将来この主題に関する出版物にクレジットが完全に記載される。

このページですでに述べた著者が恩義を感じている人々に加え、チャールズ・A・ローリング元帥、エドワード・ロビンソン氏、オーティス・T・メイソン教授、W・C・ウィンズロウ牧師、T・F・ハント氏、W・S・ビグロー博士、ジョン・ロビンソン教授、S・R・ケラー氏、E・F・フェノロサ教授に言及したい。

底本：デジタル化された Harvard College Library 所蔵版
翻訳：山口　諒